

「とんぼのめがね」作曲者の孫 世界を癒やす調べ

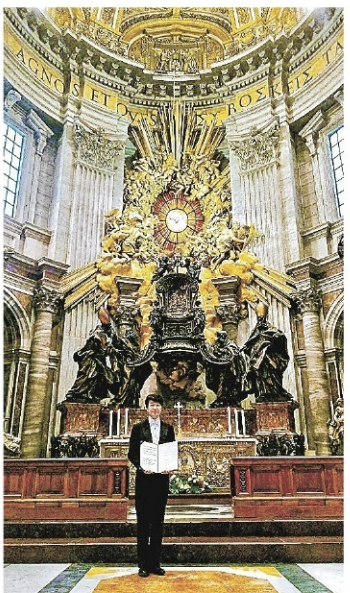
平井秀明さん、元喜さん兄弟

ニューヨーク祝祭管弦楽団音楽監督・指揮者の平井秀明さん(四七)と、英国在住のピアニスト・作曲家の平井元喜さん(四四)の兄弟は、それぞれバチカン市国と駐日デンマーク王国大使公邸で演奏を披露した。二人は広野町ゆかりの童謡「とんぼのめがね」を作曲した平井康三郎さんの孫で、世界を舞台に多彩な活動を展開している。

平和願う音楽献呈

秀明さんは十月、日本、米国、イタリアの有志による合同合唱団とともにバチカン、ローマの演奏ツアーを行った。

二十八日にバチカン市国のサン・ピエトロ大聖堂で世界各地の紛争やテロ、貧困、差別などの問題に対し人種や宗教の枠を超えた平和を願うミサが行われた。秀明さんは自ら作った「Ave Maria」をはじめ、バッハ、モーツァルトの曲など四曲を指揮した。



サン・ピエトロ大聖堂での演奏に臨んだ秀明さん



秀明さんの指揮で歌声を響かせたミサ

ローマ法王とバチカン市国への献呈文を「Ave Maria」の自筆譜に添え、ベンの交響曲第九番を演奏した。

二十七日にはローマのサン・ジョバンニ・フィレンティーニ教会で「Ave Maria」とベートーヴェンの交響曲第九番を演奏した。

三十日にはパラディウム劇場でローマ・トレ管弦楽団の二〇一七〜一八シーズン開幕定期演奏会にデビュー。メンデルスゾーンのピアノ協奏曲と、ベートーヴェンの「第九」を指揮し、七分間もの熱狂的なスタンディング・オベーションを受けた。



デンマーク王国大使公邸でピアノ演奏を披露した元喜さん(左)とスウェーデン大使夫妻

秀明さんは「世界一の教会のスケールや荘厳な雰囲気、大変光栄なことと感謝している」と感想を述べた。

デンマーク民謡に乗って踊りの輪を広げた出席者



民話と音楽融合

元喜さんは十一月九日、東京都渋谷区の駐日デンマーク王国大使公邸で開かれた日本・デンマーク外交関係樹立百五十周年記念「音楽と民話」に出演し、世界の民話と音楽が融合した「音楽と民話」の朗読、映像のコラボレーションに取り組んでいる。

元喜さんは二〇〇七年から国際文化交流・教育プロジェクト「世界を結ぶ民話」として音楽と民話の朗読、映像のコラボレーションに取り組んでいる。

主催者のフレディ・スウェーデン駐日デンマーク王国大使とリセ夫人が約五十人の出席者を歓迎。第一部は「デンマークと日本の文学と絵本」と題し、「小倉百人一首」による音詩を

デンマークでの初演からこれまで約二十カ国で開催し、十周年を迎えた。今回はその一環で、2020東京五輪・パラリンピック文化プロジェクトとしての第一弾。

デンマーク料理を味わいながらの交流会もあり、和やかに懇談した。元喜さんは「音楽は国境を超える。日本とデンマーク、世界の友好が深められるよう努力したい」と話していた。

福島民報社の佐藤克也文芸部長が出席した。

元喜さんのピアノ、石山智恵さんの朗読、久保修さんの切り絵で魅了した。情感豊かな和歌の世界を柔らかな旋律が彩り、訪れた人を楽ませた。続いてスウェーデン大使がデンマークの小説「スミラの雪の感覚」を朗読し、平井さんが伴奏。絵本「100万回生きたねこ」も披露された。

第二部は「デンマークと日本の音楽」として、元喜さんが自らの組曲「日本の情景」や東日本大震災後につくった「Grace and Hope」祈り、そして希望、ニールセンの「六つのユーモレスク・バガテル 作品11」などを熱演した。最後にスウェーデン大使夫妻が「糸まきまき」で知られるデンマーク民謡「靴屋のポルカ」を歌いながら踊り、出席者全員で一緒に踊りの輪を広げた。